

当院における認知症高齢者の生活機能回復訓練の実態

— 歯磨きを中心に —

前田早紀 宮島光子 板井裕美 上田奈保 橋
口花子 寺田恵子

医療法人聖志会渡辺病院

【はじめに】認知症高齢者の入院生活での身体・認知機能の維持への生活機能回復訓練は重要な位置をしめ、特に歯磨きを中心とした整容は重要である。しかし、認知症高齢者の特性からスムーズに歯磨きが出来ない事がある。今回、A病院の認知症病棟に入院する患者に対して歯磨き時の状態を調査し、困難の有無、その解決法を調査検討したので若干の考察を加えて報告する【対象】平成22年12月1日現在の認知症入院患者310名（アルツハイマー型認知症217名、脳血管性認知症44名、混合型認知症6名、レビー小体型認知症9名、ピック病2名、アルコール性認知症32名）。男性141名、女性169名。平均年齢78.6才。HDS-R：測定不可・0～10点230名、11～20点60名、21～30点20名【方法】平成23年1月に上記対象者310名に対して歯磨き時の自立、介助時の困難、その具体例と対応方法を調査した【倫理的配慮】病院管理者の許可、ご家族の同意を取得し、A病院の倫理委員会の承認を得た【結果】歯磨きに何らかの困難がある方が75名いた。歯磨き困難の内訳は、拒否42名、噛み付き4名、手で叩く7名、失行・失認19名、その他3名であった。対応方法は、声掛け32名、病室から誘導1名、介助14名、片手を押さえて6名、2人で対応9名、指ガード使用4名、無理せず延期が9名であった【考察】A病院の調査で、入院患者において約20%の方に歯磨きに何らかの困難があり拒否が半数以上であった。担当の作業療法士は、殆ど声掛けや簡単な介助で対応可、問題となる事は少なかった。一方、2人で対応、指ガード使用、手を押さえる等が約20%程度の方に必要であった。今後、声掛けの内容や介助の方法をさらに工夫・発展させBPSDの軽減に繋げたい。